

台湾を考えることは、 東アジア百年の歴史を 考えることだ

タブーだった台湾研究に
私を取り組んだきっかけ

大学では学園紛争、中国では文化大革命の最中である1968年に中国語



中国文学科に入学しました。中国について考えるには日本との関係を抜きにできません。さらにつきつめていくには侵略の原点である台湾統治についても知る必要があります。そう思っているときに、戴國輝さんに出会って、



『童年往事』
(邦題「時の流れ」)
1988年公開作品
(発売終了)



『多桑——父さん』
1994年公開作品(発売終了)

台湾研究の手ほどきを受けることができました。ちょうど台湾で民主化運動が活発になってきた時期でした。こうして関心が民主化運動に移っていき、自然と関連性が深い台湾の現代文学に興味を持ち始めたわけです。

不思議なことに当時、とりわけ中国研究者にとって台湾研究はタブーになっていました。しかし、80年代以降アジアに対する関心が高まり、89年の天安門事件での大陸中国に対する幻滅感、台湾の民主化運動に対する関心などから、次第に台湾研究者が増えてきました。

台湾ニューシネマで

台湾に関心を持ちだした日本人

70年代の台湾研究は、国民党研究とほぼイコールでした。つまり、台湾の

民衆が何を考えているかといった視点が欠如していたのです。だからこそ、民主化運動の進展が、研究者を引き付けていったといえるでしょう。ちなみに、80年代に私たちが台湾小説を翻訳するまで、台湾小説はほとんど日本に入ってきていませんでした。

一般的には、台湾ニューシネマといった映画の文脈で知られていた程度です。それも作家・映画研究家の田村志津枝氏がプロデュースしたマニア向けのものでした。ところが90年代になって、『悲情城市』が大ヒットしました。これは、国民党政府による「台湾大屠殺」2・28事件(1947年)を映画で初めて取り上げたものです。民主化運動の成功のうえに立った作品であり、87年の戒嚴令解除後の社会の自由化を反映している作品といえます。こ

うした映画を入り口として、台湾に關心を持つ日本人が増えてきました。

華文文学と異邦人としてのアイデンティティの相克

世界華文文学というジャンルがあります。台湾や香港など、中国本土とは別の領域だが中国が領有権を主張している、主権のあり方が中国本土とは異なる地域の文学。東南アジアの華僑・華人社会、インドネシアやマレーシアなどアイデンティティが明確ななかで華人系として生きている人たちの文学。あるいはアメリカやヨーロッパなどに移民として入っていった人たちの文学……中国系の人たちは数多く集まるとなると独自のコミュニティを持ちますから、そこに独自の文学が生まれます。

彼らが中国語で綴る文学は、華文文学になります。しかし、アメリカなど英語圏では、地域に定着して2世、3世となり、日常的には英語を使います。英語で書いたときは、華人文学ではありませんが、華文文学ではありません。80年代には留学生文学が流行りました。海外に留学しているときは、華文文学で、中国に帰ると中国文学のなかの留学生文学というジャンルになるわけです。さらに、各国によってアイデン

ティティが違います。混沌としています。が、いずれにしても複雑なアイデンティティのありかたが問題になります。

「落葉帰根」から「落地生根」へ 価値観の変化が独自性を生む

東南アジアでは、マレーシアやシンガポールなどで華文文学が盛んです。そこでは、各国のなかで、華人系住民としてどう生きていくかということが問題になります。大陸中国には世界華文文学学会があり、華文文学は中国文学を基盤とした文学であるとして、その共通性を強調しています。つまり、マレーシアやシンガポールの文学を中国文学の支流と見なしているのです。これに対して、80年代初めに東南アジアの人たちが中国文学とは違う独自の文学であると異議申し立てをしました。

このようにはっきり主張ができるのは、マレーシアなどでは戦後独立した際に、華人は国に残るか中国に帰るかを選択を強いられたからです。かつては、外地で成功して故郷に錦を飾る「落葉帰根」が理想でした。しかし、自分たちのアイデンティティを模索し始めた60年代に入ってから、その土地に根をおろしてやっていこうという「落地生根」へと価値観が変わってきたのです。

独自性を踏まえた

台湾ナショナリズムの芽生え

台湾では大陸中国とは別の形で社会を築いてきています。日清戦争は中国の革命を加速させましたが、ちょうどその時から台湾では日本統治のもとで近代的社会づくりを行うことになりました。戦後は冷戦体制下にあつて、別な枠組のなかで、まったく別の社会づくりを行ってきたのです。

しかし、日本支配で大陸と切り離されたこともあつて、台湾では中国ナショナリズムと合流することで日本支配から脱しようという動きがありました。つまり、台湾ナショナリズムとの二重構造になっていたのです。その共存は、日本支配時代には矛盾がありませんでした。

民主化運動が始まる前は、国民党政権が国家社会の方向性を決めていました。冷戦構造が主要な決定要因で、台湾の民衆の立場が直接反映されているわけではなかったのです。

70年代になって、台湾では民主化運動、中国では文化大革命が始まりました。外省人支配のなかで、台湾人は中国人と違うという台湾ナショナリズムが強くなっていくのです。70年代の米中

国交回復により、台湾は独立した国際的な人格を求めるようになってきました。大陸に対する台湾ナショナリズムから、李登輝の「新台湾人」が生まれます。

冷戦構造が崩れて、それぞれの社会のなかでの民主化運動の動きが、社会の方向性の決定要因になってきました。それまでは、国民党政権は中国というフィクションのうえに立つことで、台湾人の主権を制限してきました。台湾は中国という大きさを否定することで、民主化が進んでいったのです。なお、元来の台湾語は福建省出身者が多いこともあつて、閩南語ミンナンという中国のなかでも辺境の言葉です。しかし、最近ではその台湾語で書こうという運動が起こっています。これも台湾ナショナリズムの表現のひとつです。

日本人は80年代に入ってから、台湾への関心を強めています。台湾について考える際には、歴史を踏まえて考えることが必要です。日本、中国を含む東アジア百年の歴史を考えることこそ、台湾を考えることなのです。(談)

言語社会研究科教授

松永正義

(まつなが・まさよし)

1973年東京大学文学部中国語中国文学科卒業、1978年東京大学大学院人文科学研究科(中国語中国文学)単位取得満期退学。1986年～1992年一橋大学経済学部助教授、1992年～1996年一橋大学経済学部教授、1996年一橋大学大学院言語社会研究科教授として現在に至る。著書に『台湾文学のおもしろさ』(研文出版 2006年)、『台湾を考えるむずかしさ』(研文出版 2008年)などがある。